

論文の内容の要旨

氏名：宮下 達哉

博士の専攻分野の名称：博士（心理）

論文題名：審美的価値観と絵画の美的評価との関連についての心理学的検討

本論文は、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して示した研究である。本論文の全体図を Figure1 に示す。

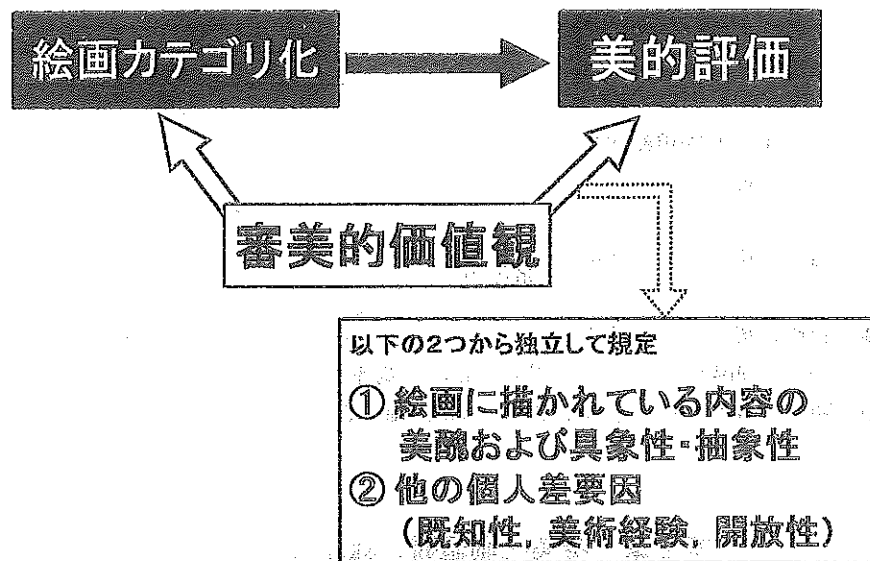


Figure1 本論文の全体図。

第1章 序論

本論文の出発点として、描かれたものを絵画であると判断することを絵画カテゴリ化と定義し、その上で絵画に対する美的評価について検討した。

絵画カテゴリ化が生じた絵画は、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われる。美的評価とは、表現する語彙が異なっても、その根底には共通の快評価があるという概念である (Berlyne, 1974)。

絵画カテゴリ化後の絵画に対する美的評価が、審美的価値観に規定されると考えた。審美的価値観とは、Spranger (1921) の提唱した6つの普遍的価値観 (理論・経済・審美・宗教・社会・権力) の1つであり、美しさを重視する価値観である。また、審美的価値観は重要な判断をする際の普遍的な基準である (Kluckhohn, 1951 ; 李, 2008)。

これらのことより、審美的価値観を重視する者は、美しいかどうかという判断基準に基づき、視覚対象を絵画である判断する。すなわち、審美的価値観の高い者は、絵画カテゴリ化された絵画に対する美的評価が高くなると考えられる。さらに、審美的価値観の高い者は、絵画カテゴリ化された絵画を美しいものだと判断するため、絵画に描かれている内容の美醜および具象・抽象性に関わらず、また、審美的価値観以外の個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価が高くなると考えられる。

審美的価値観が絵画に対する美的評価を規定するかを実証的に検証するため、本論文は2つの方法を用いて検討した。すなわち、審美的価値観は、①絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、②他の美的評価を規定する個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討した。

1点目の絵画に描かれている内容とは、描かれているものの美醜、具象性/抽象性を指す。具体的には、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いものどちらであっても、また、絵画に描かれている内容が具象画あるいは抽象画のどちらであっても、それらの内容の違いに左右されず、審美的価値観は絵画に対する美的評価を規定すると考えられる。

2点目の他の美的評価を規定する個人差要因とは、絵画の既知性、美術経験の有無、Big Fiveの開放性を指す。絵画の既知性について、絵画の既知性が絵画の美的評価を規定する論拠として、Zajonc (1968)の単純接触効果が考えられる。美術経験の有無とBig Fiveの開放性について、抽象画・具象画に対する美的評価は、これら2つの個人差要因によって関連の様相が異なることが先行研究より報告されている (Table1)。

これらのことより、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して示すことが本研究の大目的であった。その上で、本論文が検討する具体的な目的は大きく2つであった。すなわち、①審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず美的評価と関連するか検討すること、②審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

Table1
美術経験および開放性と抽象画・具象画との関連の様相の違い

		抽象画	具象画
美術経験	有り	美的評価 高い	—
	無し	—	美的評価 高い
開放性	高い	美的評価 高い	—
	低い	—	—

第2章 審美的価値観と絵画カテゴリ化

第2章は、研究1から成り立っており、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。

研究1は、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。調査では、モザイク処理を行った3枚の絵画(風景画、静物画、人物画)に対して絵画カテゴリ化(i.e., あなたはそれを絵画だと思いますか?)を測定した後、審美的価値観を測定した(N=96)。その結果、審美的価値観と絵画カテゴリ化との間に有意な正の相関がみられた。

第3章 審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず絵画の美的評価と関連するか

第3章は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず絵画の美的評価を規定するか検討するために、2つの研究を実施した。

研究2は、絵画に描かれている内容の美醜に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。調査では、6枚の絵画(美しい対象が描かれた絵画3枚と醜い対象が描かれた絵画3枚)に対する美的評価を測定した後、審美的価値観を測定した(N=89)。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に

描かれている内容が美しいもの及び醜いもののどちらであっても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究3は、具象画・抽象画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。調査では、6枚の絵画（抽象画3枚と具象画3枚）に対する美的評価を測定した後、審美的価値観を測定した（ $N=96$ ）。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、抽象画と具象画どちらに対しても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究2および研究3の結果は、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いものであっても、また、具象画あるいは抽象画であっても、絵画に対する美的評価が高いことを示した。従って、審美的価値観は、絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、一貫して美的評価を規定することが示唆された。

第4章 審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか

第4章は、審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討するために、4つの研究を実施した。

研究4は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価を規定するか検討した。処理流暢性理論 (Reber, Schwarz, & Winkielamn, 2004) では、呈示された刺激に対する情報処理が流暢に行われるほど、その刺激に対する美的評価が高まるといわれている。この時、美的評価の上昇が刺激に対する親近性に誤帰属すると考えられている (Bornstein, 1992)。こうした誤帰属によって、単純接触効果が生じるとされる (Bornstein, 1992; Jacoby & Kelley, 1987)。従って、既知性が絵画の美的評価を規定する論拠は、単純接触効果に基づくと考えられる。調査では、研究2と同様の6枚の絵画に対する美的評価を測定した後、審美的価値観、既知性 (i.e., あなたはその絵画を観たことがありますか?) を測定した ($N=79$)。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、既知性はこれらと関連しなかった。

研究5は、審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。調査では、美大生 ($N=140$) と一般学生 ($N=96$) を対象に、研究3と同様の6枚の絵画に対して美的評価へ回答を求めた後、審美的価値観を測定した。その結果、美大生と一般学生どちらの群においても、審美的価値観が高い人は低い人よりも抽象画および具象画に対する美的評価が高いことが示された。

研究6aは、審美的価値観は開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。調査では、合計24枚の絵画を刺激として呈示し、これらの絵画に対する美的評価、審美的価値観、開放性を測定した ($N=110$)。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。

研究6bは、研究6aの再現可能性を検討した。研究6aで対象とした調査参加者は心理学部の学生のみが対象であったため、心理学部以外の学生も調査対象とすることで、研究6aの追試調査を行った。調査は、研究6aの手続きを踏襲し、323名の調査参加者（内訳は、理工学部の学生209名、教育学部の学生72名、心理学部の学生42名）を対象に行った。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。この結果は、研究6aの結果を支持するものであり、研究6aから得られた知見の再現可能性を示唆するものであった。

研究4、研究5、研究6a、6bの結果は、審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連することを示すものであった。

第5章 総括

第5章は、本論文が実施した一連の研究によって明らかになったことを記し、それに対する総合的な考察をした。本論文は7つの実証研究を通して、審美的価値観は、①絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、絵画に対する美的評価を規定すること、②絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず、絵画に対する美的評価を規定することを示した。これらの結果から、審美的価値観が絵画に対する美的評価を規定するという新たな知見を提示した。

基礎論文

- [1]. 宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2016a). 審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討——ヘドニックトーンと認知的美的評価に着目して—— デザイン学研究, 63(2), 25-32.
- [2]. 宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2016b). 審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討 (2) ——美大生と一般大学生の比較—— 日本大学心理学研究, 37, 28-36.
- [3]. 宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2017). 美的評価の個人差要因——開放性および審美的価値観との関連—— 日本感性工学会論文誌, 16(3), 315-320.
- [4]. 宮下 達哉・白川 真裕・木村 敦・岡 隆 (2018). Big Five の開放性と美的評価との関連——媒介変数として審美的価値観に着目して—— 日本感性工学会論文誌, 17(2), 251-256.